

明治後期から大正期の福祉をめぐる公共空間と仏教社会福祉

ー渡辺海旭によるドイツ型セツルメントと大乘仏教思想ー

○ 上智大学 井川 裕寛 (009998)

〔キーワード〕 渡辺海旭・仏教社会福祉・福祉をめぐる公共空間

1. 研究目的

本研究の目的は、戦前の仏教社会福祉の到達点と評された渡辺海旭（1872～1933）の活動や思想を、日露戦争期以降の福祉をめぐる公共空間の形成過程に位置付け、明治後期から大正期にかけて仏教社会福祉活動が担った公共的機能とそれを支えた社会倫理を検討することにある。

本研究で注目する明治後期は、国内の産業革命が起こり、新たに労働者階級が生じ始めた時期である。また、中央慈善協会や感化救済事業講習会の動向が示すように、深刻化する社会問題への対応をめぐる国家・行政と民間の積極的な交渉がもたれ、福祉をめぐる公共空間が形成されはじめた時代でもある。この時期にドイツから帰国した渡辺海旭は、既存の慈善事業の問題点と限界を認識し、仏教的な立場から社会事業への転換を主張する。そして、浄土宗教団の後ろ盾のもとに、近代的なシステムを備えた浄土宗労働共済会の運営に乗り出し、公共圏に対して大乘仏教の思想に基づく社会倫理理念を提示する。

渡辺海旭については、主に近代仏教史や仏教社会福祉史の観点から、吉田久一や芹川博通らによる多くの研究成果が著されている（吉田久一『日本近代仏教社会史研究』吉川弘文館、1964年、芹川博通『渡辺海旭研究——その思想と行動』大東出版社、1978年）。また2000年代以降、とくに吉田の問題意識の前提となった近代仏教史研究の積極的な捉え返しが進められている。先行研究を踏まえて本研究では、近代日本の福祉をめぐる公共空間に注目する立場から、その形成過程における仏教的な倫理観に基づく社会福祉活動の意義を検討する。こうした公共空間に注目する立場から仏教社会福祉活動の独自性を示すことで、多様な主体によって形成された社会福祉史のもつダイナミズムを明らかにすることを目指す。

2. 研究の視点および方法

本研究では、社会福祉史や仏教社会福祉史の研究成果に学びながら、宗教と社会の相互作用に着目する宗教社会学の立場に立ち、複数の主体が個別・独自に福祉活動を展開したことで形成された公共空間に焦点を当てる。その上で、他の民間集団と並んで自律的集団としての仏教が、独自の倫理観に基づく福祉活動を通して公共空間に参加する姿に着目し、その民間活動が行政や福祉制度などの公的領域と相互に関係しあうあり方を重視することで既存の社会福祉史の捉え返しを行う。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程に則り、研究を進めている。本研究は歴史研究、文献研究であるため、とくに規程内容における引用、不適切用語の項目に配慮している。

4. 研究結果

日露戦争以降、ジャーナリズムの発達により、貧困問題が社会全体で解決すべき問題として認識されるようになる。それと並行して、民間の有志による慈善事業は活発化するが、上から下へと施される慈恵的な側面の活動に対して批判が集まることとなる。こうした慈善事業の問題点に対して、ドイツ留学から帰国した渡辺海旭は、衆生恩思想や仏性思想を含む大乘仏教思想に基づく社会倫理理念として共済思想を提示する。この思想を背景に展開された仏教社会事業は、事業の対象者と対等であろうとする姿勢で行われ、対象者の人間性を尊ぶ方向性をもつ仏教的なセツルメントへと発展する。

渡辺が提示した共済思想は、衆生恩思想をてこに大乘仏教や浄土教思想を基盤にしつつ提示されたものであった。そして、この倫理観に基づく社会作りを目指し、社会福祉領域でその具現化を試みたのが渡辺の社会福祉事業であった。その立場は、急進的な社会改革を目指した社会主義に基づくセツルメントや、国家にとっての「危険思想」の防止を主たる目的とする社会事業および思想善導の運動とは異なるものであった。渡辺の目指した活動は、資本主義社会によって生じた弊害を是正しようとするとともに、労働者の自立支援を促す教育を重視するものであった。

5. 考察

戦後の仏教社会福祉史の研究成果では、戦前の国家協力に対する批判的立場から、渡辺海旭の社会事業が国家に対置されるのか、否かという点に関心が集まってきた。これに対して本研究では、大正期に政府が仏教界の社会福祉活動の取り組みに期待するようになった事実を踏まえ、仏教社会福祉活動と政府・行政の交渉によって生じる福祉をめぐる公共空間とそこでの公共的機能に着目した。そうした視座に立つとき、渡辺の「在野性」を強調するのではなく、政府・行政やキリスト教、その他の多様なアクターと互いに関係し合いながらも発揮された仏教社会福祉活動の自律性および独自性を捉えることの重要性が浮かび上がってくる。その意味で渡辺海旭は、社会問題が本格化し、公共空間が形成され始めた明治後期から大正期に、仏教社会福祉活動のもつ公共的機能を探究し、先導する象徴的な存在だったといえる。

付記

本研究は、博士論文「近代日本の仏教社会事業の公共的役割と社会倫理」（上智大学、2021年3月）の第2章「渡辺海旭による仏教社会事業の公共的役割——ドイツ型セツルメントと共済思想」の研究成果を踏まえ、大幅に加筆・修正を行ったものである。また、本研究の遂行にあたり、上廣倫理財団令和4年度研究助成を受けている。